

令和2年度第1回

さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会

会 議 録

日 時：2020年7月27日（月）午後6時30分開会
場 所：札幌市役所本庁舎 12階 1号から3号会議室

1. 開 会

○事務局（浅村政策企画部長） それでは、定刻より少し早いのですが、皆様、おそろいのようなので、ただいまから令和2年度第1回さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会を開会させていただきたいと思っております。

皆様には、大変お忙しい中をご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

会長選任までの間、進行を務めさせていただきます札幌市まちづくり政策局政策企画部長の浅村でございます。よろしくお願いたします。

最初に、今日いろいろと席上に配付しているのですけれども、感染症対策の関係で、マイクの使い方についてご説明したいと思います。

残念ながら、1人1本専用となっていませんので、ウエットティッシュをお配りしています。マスクをしていると飛沫はあまり飛ばないと言われているのですが、手持ちのところを共用すると、そこから接触感染するということがカラオケの事例を見てもあるようですので、つかんだときにはウエットティッシュで拭いていただいて、ゴミ袋がありますので、そちらに捨てていただくということで、お手数ですけれども、ご発言でマイク等に接触された場合には、その後の殺菌をお願いできればと思います。

それでは、まず、初めに、札幌市まちづくり政策局長の小西からご挨拶を申し上げます。

○小西まちづくり政策局長 おぼんでございます。

ご紹介にあずかりました札幌市まちづくり政策局長の小西でございます。

令和2年度第1回目となりますさっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会の開会に当たりまして、一言、ご挨拶申し上げます。

本日、ご出席の皆様におかれましては、非常にご多用のところ、また、昨今、新型コロナウイルスということで、今、特に東京方面で猛威を振るっているようでございます。札幌は、小康状態とはいえ、今日も4人ほど新規の感染者が出ております。ただ、20代の方3名と30代の方1名と最近はやい方が増えているということでございます。いずれにいたしましても、厳しい状況の中をお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

さて、さっぽろ連携中枢都市圏でございますけれども、昨年3月に「住みたくなる」「投資したくなる」、「選ばれる」さっぽろ圏域を目指しまして形成をしたところでございます。札幌市を含めます圏域の12市町村が一丸となって様々な連携した取組を行いながら、魅力、そして、活力のあるまちづくりを推進しているところでございます。

また、昨年3月に策定いたしましたさっぽろ連携中枢都市圏ビジョンにつきましても、改めまして、本懇談会の皆様のご意見を伺いまして、本年4月に変更版という形で公表させていただいたところでございます。

本日は、圏域形成の初年度であります2019年度の取組の効果検証のほか、2020年度のビジョンの概要、また、現下の社会情勢の変化等を踏まえまして、新たな取組等につきましてもご説明をさせていただき、さっぽろ圏のさらなる発展に向けまして、それぞれ

ご専門や、お立場からの貴重なご意見を頂戴できればというふうに考えております。

限られた時間でございますが、忌憚のないご意見を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

◎資料の確認

○事務局（浅村政策企画部長） それでは、これから議事を進めてまいります。

まずは、皆様のお手元にあります資料の確認をさせていただきたいと思っております。

次第のほかに、資料として7種類ございます。資料1、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会構成員名簿・座席表、資料2、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会設置要綱、資料3、さっぽろ連携中枢都市圏2019年度連携事業実施状況等概要、資料4、さっぽろ連携中枢都市圏2019年度連携事業実施状況等一覧、資料5、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン概要（2020年4月変更版）、資料6、さっぽろ連携中枢都市圏関連スケジュール（2020年度）、そして、資料7、現下の社会情勢の変化と2040年問題に対するさっぽろ連携中枢都市圏の新たな取組でございます。

また、参考資料といたしまして、ビジョンの2020年4月変更版の白冊子、それから、さっぽろ圏のまちづくりへの応援のお願いのリーフレットをお配りしております。

資料の過不足はございませんでしょうか。

◎懇談会の目的

○事務局（浅村政策企画部長） 続きまして、本懇談会の目的ですけれども、資料2としてお配りをしておりますさっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会設置要綱第1条にも規定をしてありますとおり、連携中枢都市圏ビジョンに関しまして、必要な協議や懇談を行うという点でございます。

本懇談会でいただいたご意見等を通じまして、よりよいビジョンにしていきたいというふうに考えておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

◎構成員の委嘱

○事務局（浅村政策企画部長） 次に、本懇談会の構成員の皆様の委嘱についてでございますが、既に委嘱状をお手元に配付させていただいております。大変恐縮でございますけれども、この配付をもちまして、委嘱に代えさせていただきたく思いますので、ご了承いただきますようお願いいたします。

なお、本日の懇談会につきましては、14名のご出席をいただいておりますので、先ほどの要綱第6条第3項に基づき、会議が成立していることをご報告いたします。

2. 委員の紹介

○事務局（浅村政策企画部長） 次に、構成員等のご紹介ということで、ご就任いただきました構成員の皆様をお一人ずつ、事務局の左側から時計回りでご紹介をさせていただきますと思います。

まず、最初に、公益社団法人北海道観光振興機構常務理事兼事務局長の木原昌良様でございます。

続きまして、株式会社北洋銀行地域産業支援部長の越田雄三様です。

続きまして、一般財団法人さっぽろ産業振興財団専務理事の酒井裕司様です。

続きまして、北海道農業協同組合中央会参事の高橋和則様です。

続きまして、株式会社北海道銀行地域創生部次長兼地方創生担当部長の辻英樹様です。

続きまして、北海道商工会連合会組織経営支援部参事の津呂真一様です。

続きまして、社会福祉法人北海道社会福祉協議会事務局次長の富田彰様です。

続きまして、札幌市立大学名誉教授の中原宏様です。

続きまして、一般社団法人札幌市医師会地域医療部長の西村光弘様です。

続きまして、北海道大学大学院経済学研究院教授の平本健太様です。

続きまして、一般社団法人北海道商工会議所連合会政策企画部長の福井邦幸様です。

続きまして、札幌地区バス協会参与の三戸部正行様です。

続きまして、環境省北海道地方環境事務所環境対策課長の向田健太郎様です。

最後になりますが、小樽商科大学大学院商学研究科特任教授の李濟民様です。

事務局は、局長の小西、そして、私、課長の玉井で本日の会議の進行を補佐させていただきますので、よろしくお願いいたします。

3. 会長・副会長の選任

○事務局（浅村政策企画部長） 続きまして、本懇談会の会長と副会長の選任を行いたいと思います。

さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会設置要綱第5条第1項の規定におきまして、構成員の皆様の互選により会長及び副会長を置くこととしております。

どなたかご推薦がある方がいらっしゃいましたら、挙手の上、ご発言をお願いいたします。

○中原委員 これまでと同様、会長には平本先生、副会長には李先生がご適任であると考えますので、お二人の先生を推薦したいと思います。

○事務局（浅村政策企画部長） ただいま、会長には平本様、副会長には李様というご推薦がございましたが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）（拍手）

○事務局（浅村政策企画部長） ありがとうございます。

ご異議がないようでございますので、平本様に会長、李様に副会長をお引受けいただきたいと思います。

それでは、平本様、李様は、会長席、副会長席にお移りいただければと存じます。

〔会長、副会長は所定の席に着く〕

○事務局（浅村政策企画部長） では、ここからの議事進行につきましては、平本会長にお願いしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

○平本会長 皆様、改めまして、こんばんは。

ただいま会長に選任されました北海道大学の平本でございます。

これまで、この懇談会の会長という形でやっております、引き続きということになります。今日も皆様方の忌憚ないご意見をいただきまして、このビジョンがよりよいものになるように思っておりますので、どうかよろしくお願ひ申し上げます。

○李副会長 小樽商科大学の李と申します。

平本会長と一緒に、二人三脚で、皆さんの忌憚のない意見をまとめていきたいなと思ひます。よろしくお願ひいたします。

4. 資料説明

○平本会長 それでは、ここから私が進行させていただきたいと思ひます。

早速ですが、まず、事務局より、本日、配付していただきました資料につきましてご説明をいただきたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

○事務局（玉井広域連携担当課長） 広域連携担当課長の玉井でございます。

では、順に、お配りした資料につきましてご説明いたします。

なお、構成員の皆様事前に差し上げた資料から若干の修正を行っているものがござひますので、ご了承願ひます。

まず、A4判の資料3、「さっぽろ連携中枢都市圏2019年度連携事業実施状況概要」をご覧ください。

上段に、「各連携事業における重要業績評価指標（KPI）」として記載しておりますとおり、昨年度の総括といたしましては、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン掲載事業の評価可能な指標について、「圏域全体の生活関連機能サービスの向上」を中心とした9指標が今後改善を要するものの、8割以上の指標におきまして「達成済み」、または、「達成見込み」となっております、圏域形成初年度としては順調な滑り出しであったものと考えております。

続きまして、指標を達成した主な事業についてご紹介いたします。

ただいまご覧になっておられます資料3の中段部分のほか、細かいものについては、その次についておりますA3判の資料4を適宜ご参照いただきながらご覧いただければと思ひます。

まず、経済分野の取組で申し上げますと、連携した「企業誘致の推進」といたしまして、昨年度より「札幌圏設備投資促進補助金」の適用地域を8市町村に、岩見沢市と南幌町も加えた圏域内の10市町に拡大したほか、昨年11月には「さっぽろ圏」としてメッセナ

ゴヤの産業展示会に共同出展し、圏域全体でより一層の企業誘致の推進を図っております。

また、二つ下、「新産業の育成に向けた支援」といたしまして、「食」「健康医療」「環境（エネルギー）」「IT」「製造」の分野を対象とした実用化・事業化の可能性が高い新製品、新技術開発等に対する支援を圏域全体で展開したほか、昨年8月には、共同プロモーションや、観光資源の活用等の推進といたしまして、圏域内全市町で構成いたします「さっぽろ連携中枢都市圏観光協議会」を設立しまして、戦略的な共同プロモーション等の企画、実施を行っているところでございます。

続きまして、都市機能分野の取組といたしましては、「公共施設の相互利用や配置に関する検討」としまして、さっぽろ圏における火葬場の効率的、安定的な運営の維持、災害等の協力体制など、昨年度の検討結果等を踏まえ、今後さらなる検討を進めていく考えでございます。

続きまして、中段の右側、生活関連分野の取組といたしましては、「地域定着等の促進」としまして、昨年9月、高校生向けの仕事体験イベント、「ワク！WORK！学校祭」を開催いたしまして、計6,425人の参加があったほか、「企業によるまちづくり活動の促進」といたしまして、昨年7月に、圏域内全市町村が11協定、15企業様とさっぽろ連携中枢都市圏まちづくりパートナー協定を締結いたしまして、パートナー企業とともに、圏域内市町村の特産品を活用した商品開発や、「さっぽろ圏高齢者運転免許証自主返納支援制度」の創設など、様々な連携した取組を展開しているところでございます。

他方、指標の達成ができなかった9指標のうち、「遠隔会議システムの導入・活用」や「オープンデータプラットフォームの共同利用」などにつきましても、現下の社会情勢におきましては、必要性、重要性がより高まっておりますので、さらなる推進を図ってまいりたいと考えております。

そのほか、各連携事業の実施状況等の詳細につきましては、先ほどご紹介いたしましたA3判の資料4、「さっぽろ連携中枢都市圏2019年度連携事業実施状況等一覧」にまとめておりますので、後ほどご覧いただければと存じます。

なお、同じ資料3の下段にございます3つの役割における重要業績評価指標につきましては、全体的に悪化傾向にございますが、新型コロナウイルス感染症の影響等も今後見込まれ、後ほど紹介いたします新たな取組を含めた社会情勢に対応する取組の検討などを行いまして、数値の悪化の緩和、ないしは、維持向上に向けまして圏域内市町村が一致団結して尽力していく所存でございます。

ここまでの2019年度の結果概要についての資料のご説明でございます。

資料をおめくりいただきまして、続きまして、A3判カラーの資料5のご説明をさせていただきます。

資料5、「さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン概要（2020年4月変更版）」につきましてご説明いたします。

本資料は、本年3月、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、各構成員の皆様

に對しましてご説明の上、ご意見を頂戴しているものでございますが、改めてビジョンの変更点を中心に、その概要をご説明させていただきます。

なお、このたびの変更部分につきましては、赤字となっておりますので、ご承知おきをいただきたいと思ひます。

また、参考資料といたしまして、「さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン」変更版の本書も机上配付させていただいておりますので、適宜、ご覧いただければと思ひます。

このたびのビジョンの変更におきましては、圏域形成初年度であることから、中長期的な将来像など、ビジョンの根幹部分の変更につきましては行っていないものの、概要版1枚目の右下にございますとおり、さっぽろ圏の三つの重点政策にひもづく連携事業と、持続可能な開発目標、いわゆるSDGsの17ゴールを結びつけることにより、より効果的な将来像の実現を目指しまして、人口減少、少子高齢社会におきましても、持続可能な圏域づくりを積極的に行っていくこととしております。

続きまして、裏面をご覧いただければと思ひます。

2020年度における予算編成や、札幌市の中期実施計画でございます「札幌市まちづくり戦略ビジョンアクションプラン2019」の策定、連携市町村のニーズ等を踏まえまして、新たに構築または拡充した事業を赤字にさせていただいております。

今後の情勢等による変動の可能性もございますが、現時点で想定している取組の幾つかをご紹介させていただきますと、変更前のビジョンにおきまして、「創業の促進」として、創業支援と連動した取組の構築を行うこととしておりましたものの、具体化といたしまして、行政や道内企業とスタートアップ企業が連携した社会・企業課題の解決に取り組むプロジェクトや、後継者不在により廃業を検討しております中小企業者と創業希望者等のマッチングに関する取組を新たに行っておりますほか、先端技術の活用や生産性の向上といいました昨今の社会において欠くことのできない視点も連携事業として新たに盛り込んでいるところでございます。

また、右側をご覧いただきますと、2040年には本圏域の65歳以上人口が約4割に達するという状況もございますことから、「高齢者の社会参加に向けた取組の促進」といたしまして、生涯現役社会の実現に向けた取組などを行うほか、「札幌市東京事務所を活用した首都圏PR等の促進」としまして、首都圏におけるさっぽろ圏の情報発信機能の強化なども行うこととしております。

そのほか、本年3月には、下段になりますけれども、さっぽろ連携中枢都市圏の人材育成確保に資する取組のため、「さっぽろ圏人材育成・確保基金」を新たに設置いたしまして、お手元に参考としてお配りいたしておりますが、企業様用、個人様用に二つのパターンのリーフレットを配布させていただいておりますとおり、企業版ふるさと納税等を活用しながら、奨学金返還支援などを含む「さっぽろ圏『ひとつづくり』プロジェクト」を推進していく所存でございます。

最後になりますが、先ほど申し上げましたとおり、昨年7月に、11協定、15企業様

とパートナー協定を締結させていただきましたことから、資料右下のとおり、本ビジョンの推進体制の中にパートナー協定締結企業も新たに位置づけさせていただいたところがございます。

今年度の改訂版の概要については以上でございます。

続きまして、資料6のご説明をさせていただきます。

「さっぽろ連携中枢都市圏関連スケジュール」でございます。

ビジョンにつきましては、毎年度、所要の変更を行う旨、国において定められており、スケジュール上段にございますとおり、本日の懇談会でいただきましたご意見のほか、8月末ごろに開催を予定しております「さっぽろ連携中枢都市圏関係首長会議」における協議等を踏まえまして、予算編成等を経た後に変更案を作成いたしまして、来年1月をめどに本懇談会のご意見を改めてお伺いした上で、来年度に向けた変更を行ってまいりたいと考えております。

そのほか、圏域内市町村の企画部門における実務者会議も2か月に1回程度定期的に開催いたしまして、緊密な連携を図っておりますほか、札幌市庁内におきましても、中枢都市としての役割を積極的に果たすべく、副市長を筆頭とする推進本部会議をはじめ、札幌圏の発展に向けた取組の推進を図ってまいりたいと考えております。

最後の資料の説明でございます。

資料7をご覧ください。

「現下の社会情勢の変化と2040年問題に対するさっぽろ連携中枢都市圏が新たな取組」についての資料でございます。

こちらには、変更版のビジョンに掲載されております47の連携した取組のほか、現下の社会情勢や2040年問題を踏まえるとともに、連携市町村のニーズも考慮し、さっぽろ圏のさらなる発展に向け、取組の強化や、追加、協議検討等が必要と思われる事柄がございます。

上からご紹介を申し上げますと、まず、「自治体行政のスマート化に関する取組の検討」といたしまして、圏域の人口減少・少子高齢化に伴う人口構造の変化や、税収の減少、人的資源の不足等に圏域が一体となって対応し、また、現下における「新しい生活様式」に資するものとして、行政サービスのオンライン化の推進や事務の共同処理等の実現可能性の検討を行ってまいります。

また、変更後のビジョンに盛り込んでおります高齢者の活躍に関連いたしました「シニアのさらなる活躍に向けた取組の検討」のほか、連携市町村のニーズも踏まえ、当面の間、インバウンド需要の停滞が見込まれるウィズコロナにおける「圏域の周遊活性化に向けた取組の推進」、さらに、昨今の休業要請により、必要性がより高まっております「GIGAスクール構想の実現に向けた課題共有等」についても取組を進めてまいります。

最下段でございますが、現在、圏域内市町村の企画部門の課長級で構成し、年6回程度開催しております「さっぽろ連携中枢都市圏実務者会議」の下に、複数の連携分野主体に

関わる専門的、横断的な課題に対応するため、時限的なタスクフォースを設置する予定でございます。

このタスクフォース第1弾となる検討課題につきましては、実務者会議におきまして連携市町村から提案をいただき、また、現在のビジョンに掲載がされていない「地域公共交通」に関するものを想定しております。

さっぽろ圏は、ビジョンに掲載している47の連携事業はもちろんのこと、時代の情勢の変化や、連携市町村のニーズに応じまして、柔軟かつ迅速に新たな取組の推進も行っていくものでございます。

私からは以上でございます。

5. 意見交換

○平本会長 それでは、ただいま資料につきましてご説明いただきまして、ここから先は、構成員の皆様方に、2019年度の成果についてのコメント、あるいは、今年度以降の方向性についてのご意見をご自由にご発言いただければと思っております。

ここから先は、特段、何についてということはございませんので、ぜひお考えをご発言いただければと思います。

どなたからでも構いませんので、ご自由にご発言をお願いいたします。

私は、事前にご説明をいただいたときに、2019年度にこの連携中枢都市圏が立ち上がった結果、それでどんな成果がありましたか、特にこの連携中枢都市圏ができて、小さな成功、あるいは、非常に顕著な取組としてあったものはどんなものがあるのかということ事務局にお尋ねしましたら、典型例ではないかということ、幾つかご紹介いただいたのですが、そういうことを少しご案内いただくことは可能ですか。それでは、ご説明いただければと思います。

○事務局（玉井広域連携担当課長） では、私から若干ご説明させていただきます。

先ほどご説明したもののほかに、救急安心センターさっぽろについては、令和元年度につきましては、札幌市、石狩市、新篠津村、栗山町、島牧町、当別町からの相談がございまして、全体で8万3,000件ほど相談がございました。そのうち、人口割合で言いますと、札幌が95%ほどということになっておりますが、相談件数ベースでいきますと、石狩市が1.68%、新篠津村が0.05%、当別町が0.37%というような状況になっております。

それから、札幌圏設備投資促進補助金について、先ほどもご説明しましたが、体制整備を行いまして、適用範囲を圏域内10市町まで拡大しております。

ものづくり関連の補助につきましても、昨年度から継続して実施しておりまして、札幌市以外でも3件ほど採択もあったというような形で、実際に補助も行っております。

それから、観光についても圏域で協議会を設置したところでもございまして、別途、周遊の活性化に向けた取組についても、今年、検討を始めるというようなことを考えておりま

す。

火葬場につきましては、火葬場や墓地の広域利用に関する各市町村の見解なども集約いたしまして、どのような視点で協議できるのかということの可能性を検討しているところでございます。

大きくいうと、このようなことをやっているということで、ご紹介させていただきます。

○平本会長 今、追加で成果をご紹介いただきました。

連携中枢都市圏ができ上がって、まだ間もないということもありますが、先ほどご説明のあった救急安心センターさっぽろのように、この連携中枢都市圏ができたことによって、札幌以外の広域のエリアから医療資源が比較的集中している札幌に対して問合せが増えていきます。

私は、この資料を事前に頂いておまして、人口当たりの利用率というのを見ると、もちろん札幌が一番多いのですけれども、実は、周辺の石狩市や当別町も札幌にかなり近いぐらいの利用、相談があるのです。ですので、こういうのは結構大きな成果の一つで、圏域の生活のレベルが上がるということは、まさに冊子の表紙に書いてある「住みたくなる」「投資したくなる」、「選ばれる」さっぽろ圏という方向性にうまく合致しているのではないかと思います。

委員の皆様方、どのようなことでも構いませんので、お気づきの点をざっくばらんにお願います。難しいことというよりは、気になる点、ないしは、ここはどうなっているかという内容でも構いません。それから、新型コロナウイルス感染症という新しい、つい半年ぐらい前まではまるで想定していなかったような出来事に我々は今見舞われているわけです。その中で、例えば、評価では達成度が低かったというところで、バツがついているMICE推進には、今年度も2億円ぐらいの予算がついているのですけれども、こういったものを本当に今後も今までと同じペースで、同じ方向性で進めていっていいのかというようなことについてもお考えがあらうかと思えます。

これは懇談会ですから、どのような点でも構いませんので、ぜひ気楽にご発言いただければと思います。

どうぞ、お願いいたします。

○酒井構成員 さっぽろ産業振興財団の酒井でございます。

資料3の昨年の未達、達成不可能の事業の中に、オープンデータプラットフォームの共同利用というのがございます。これは、この懇談会の計画段階で、私も、これをぜひということで提案をしていたのですが、今回達成できなかった事業ということで、気になっているところなのです。

たしか、私は、この圏域の中で、観光客、特にインバウンドの観光客は、札幌だけではなく周辺市町村をぐるっと回るので、そういった観光客の行動を共同でプラットフォームに入れて、それを活用すればいいのではないかというふうに発言した記憶がございます。その後、今、会長がおっしゃったように、コロナの話で、インバウンド観光客をはじめ、

国内もびたっと止まった状態でございまして、これらをどうしていくのかというところで、幾つか思うところがございます。

資料7で、今後、さっぽろ圏内の周遊活性化についての取組を協議していくことも検討されているということで、今後、首長の会議の中でこういったようなことを共同でやろうといったときに、ぜひ人の流れというものを各市町村で見える化をして、それで効果検証をやってはどうかというふうに私は思うところがございます。

実は、札幌市立大学に去年設置されました札幌A Iラボというところがございまして、そこに人流を解析していただける先生がいて、私どもは、今、札幌市立大の札幌A Iラボと人流とコロナの感染状況の相関関係を分析していただいております。最近、よくテレビで、渋谷の人出はこうだったというのが速報で出ますよね。ああいったようなデータの活用というのが今非常に進んでおりまして、これが札幌だけではなくて、各市町村のエリアと各観光施設、特定のエリアの人出というものを時系列に把握できる仕組みがございまして、実はこれは私どもの財団でも契約しているのです。こうしたようなものを、この施策と併せて活用することによって、その効果がどのように現れたのかというのを各市町村でも我々と一緒に活用していただくと、圏域の施策というものが見える化できて、また、修正も可能になってくるのかなというふうに思います。ぜひ、この人流データの活用というものをこの中でやっていくということが、ひいては、先ほどのオープンデータプラットフォームにも、その後、つながっていくのかなと思います。

それと、もう一点、関連するのですが、今後、実務者会議の中で、地域公共交通の取組というものをテーマにというお話もございました。これもデータの利活用という意味では、M a a S、モビリティ・アズ・ア・サービスの検討は、私どもの財団であったり、経済観光局と共同でこうした取組もやっています。今は札幌の中だけで考えているのですが、これを実際にこの圏域の中に広げて検討していくということもありかなというふうに思います。

我々の事業も、今後こうした周辺市町村との関係というものも含めて、現在の取組を少し見直していく必要があるのかなというふうにも思いましたので、ぜひこういう取組をやりながら、結果としてデータの共同利用というところにもつなげていければなというふうに思いました。

○平本会長 人流データの可視化と、それを将来的にはオープンデータプラットフォームに載せて共同利用するとともに、成果の検証をできるだけ早いサイクルで行っていかうというお話、それから、M a a Sを札幌にとどまらず圏域に広げて活用する、それが先ほどお話にありましたように、タスクフォースとして地域公共交通の検討も行われるということですので、そういった場で方向性について、きちんと共有していただくということについてのご意見だと思います。

ほかはいかがでしょうか。

福井さん、どうぞ。

[修正済] ○福井構成員 福井です。

今の酒井理事のお話に関連してです。

今、M a a Sのお話が出たのですけれども、実は、ここ数年、開発局や運輸局、道庁ともずっと話をしている、秋ぐらいにフォーラムをやろうという話が出ています。それもやはり理事がおっしゃるように、データがないと進まないのですが、今、バス協会でも停留所の時刻データをデータ化するという話を進められているとお聞きしています。

コロナ禍にあって、次の施策、次のステップとして何を踏んでいくかといったときに、一つはやはり公共交通のデジタル化とっていいと思うのです。M a a Sをどう進めていくか、M a a Sは、どちらかというと、今、観光の分野で言われていますけれども、実は住民の皆さんの足にもなりますので、今こそ、アフターコロナ、ウィズコロナの対応として一つ進めていく価値があるのではないかと。これが一自治体ではなくてさっばる圏域でできるというのは、もしかしたら一つの強みになる可能性があります。

今、全国各地でも、自治体単位での自動運転やM a a Sはあるのですけれども、広域圏でというのはまだないので、やはりこれを率先してできると、その先、観光もあります、この圏域の経済効果、あるいは、企業誘致、最先端技術みたいなどころにもつながっていくと思いますので、ぜひそこは一つ次の展開として進めていただきたいというのがあります。

これに関連して、デジタル化ですが、2019年の事業の中で、リモートの会議が3回しかできなかったというのがあるのですけれども、これは致し方ないと思うのです。これから実務者会議が2か月に1回ということでスケジューリングされていますが、例えば、毎月1回リモートで皆さん顔を合わせるとか、ふだんから率先して使うようなタイミングをぜひつくっていただきたいというふうに考えています。

これは、リモートワークもあるのですけれども、最近叫ばれているのは、やはり仕事しながら遊ぶ、ワーケーションの可能性につながってくると思います。例えば、札幌の方が何らかの形で周辺の都市に週末に遊びに行かれていると思うのですよ。各地の方も札幌には来られているはずなので、それを先ほど理事がおっしゃったように、人の動きを見える化すると、どういうふうに動いているかというのが見えてくると思うのです。

この資料7に、「圏域の周遊活性化」とあります。事務局の方にはお話をしたのですけれども、「周遊」という言葉がここにはマッチしないと私は考えています。周遊というのは、当別へ行って、石狩へ行って、岩見沢へ行ってみたいな流れになるというイメージだと思うのです。今は、どちらかというと、着地型で1か所を拠点にして動くと考えたら、札幌市民が周辺の自治体に動く、周辺の自治体の方々が札幌を含めて周りに動くと考えたら、M a a Sが一番生きてくる技術になりますので、何かそういったところも少し考えていただきたいと思います。

デジタル化に関連してのお話でした。

以上です。

○平本会長 広域M a a Sという形で、しかも、どちらかという、観光客向けの話が多かったのだけれども、実は地域に住んでいる人たちが公共交通を便利だと思ってこそ、初めて観光客の人たちにとっても便利なものになるのだというような発想を改めてきちんと位置づけるべきだということ、それから、ワーケーションの可能性、あるいは、周遊の見直しについてお話がありました。確かに、周遊という、昔、国鉄のころから周遊券がありましたけれども、何かぐるぐるぐるっと回ってあちこち順番に行くというイメージですが、そうではなくなっているかもしれないというご指摘かと思います。

昨年10月でしたか、我々の北大経済学部で、地域公共交通に関するシンポジウムをやったときに、十勝バスの野村社長にお越しいただいてお話しいただいたのですが、十勝も帯広市だけではなくて十勝圏として地域公共交通の見直しということを生懸命やっているのです。それで、簡単に言うと、以前よりも観光客の人も乗ってくれるのだけれども、地元の人々の活用が増えたと。これは多分大事なことで、公共交通は少し周辺部に行くとは不便で、あまり使いたくないというようなイメージだけれども、それだと地元の人々も離れていくし、観光客にとっても魅力がないということで、それをデジタル技術などを活用してうまく魅力のあるもの、有効性の高いものにしていくということが重要だということかと思いました。

ほかはいかがでございましょうか、どのような切り口でも構いません。

三戸部さん、どうぞお願いいたします。

○三戸部構成員 バス協会の三戸部です。

今のことに関連いたしまして、今ほどもお話がありましたけれども、実はバスのロケーションシステム自体、札幌は遅れていた部分がございます、札幌市のご支援をいただいて、今年3月に札幌市内でも出そろったところであります。

全道の大まかな都市では大体もう既に導入されたところですが、それぞれ固有のソフトやアプリに依存しているという形が多くて、なかなか共通のフォーマットになっていないということがございましたので、今、我々としては、観光振興機構のお力もお借りしながら、国が示している標準フォーマットに沿ってオープンデータ化するという取組を早急に進めたいと考えております。バスのダイヤ情報だけではなくて、そのときの運行情報も含めてご提供したい、最近ではじょうてつバスが混雑状況についても情報提供するということがありますので、ぜひそういったところに取り組んでまいりたいと考えております。

とにかく、コロナで、今、我々の業界は大変厳しい状況になりまして、そうした中で、ウィズコロナというか、アフターコロナというか、分かりませんが、バスのこれからの在り方そのものを考え直さなければならない時期にも来ていると思います。ぜひ先ほどの資料7にあるタスクフォースの地域公共交通の検討といった中で、今後バスがどういった役割を果たしていくのかということも一緒に検討してまいりたいと考えておりますので、よろしく申し上げます。

○平本会長 お立場から頼もしいというか、ぜひ利用者にとって利便性が上がる形での様々

な取組が行われることが望ましいと思っております。

ほかにはいかがでしょうか。

経済、生活、それから観光、そして、ウィズコロナというのでしょうか、いろいろな切り口があるかと思えます。また、ビジョンをつくった当初と価値観が変わってきてしまっている部分もあるのかもしれないというふうに私は思っているのです。どのようなことでも構いませんので、お気づきの点があれば、ぜひお気軽にご発言をいただきたいと思えます。

先ほど、福井さんがワーケーションとおっしゃったのですけれども、私は、趣味でスキューバダイビングをやるのですが、ダイビング友達の1人で、大手のコンサルティングファームでかなり上のポジションにいる女性がいるのです。彼女は、今まさにワーケーションをしまして、沖縄や屋久島にいて、日中仕事して、夕方ぐらいから海に潜って、また夜に少し仕事して、朝一に潜ってまた仕事してというような何とも羨ましい。私も許されるのだったらリモートで授業をやりながら潜り倒したいと思うのです。

でも、実際にそういう働き方をして年収5,000万円ぐらいかと思うのですけれども、そういう優雅といえば優雅、でも、働いて、両方がうまくかみ合っているなんていう人を実際に身近なところで見ています。今のは少し極端な例かもしれませんが、まさに今回のこのコロナの影響で、テレワーク、リモートワークも随分と定着するのはないか、もちろん問題点も幾つかあるということが指摘されていますが、そういった中で、働き方も含めて、もしかすると大きなターニングポイントになるのかなと思いつつ、いろいろ周りの出来事を見ている次第です。

また、先ほどの周遊という言葉がいいかどうかは別として、この圏域内での人の流れ、特に観光やレジャーという意味で人の流れをつくり出すということで、これも事前に事務局の方とお話ししたのですけれども、私も、札幌市民になってもうかれこれ30年近くになるのですが、今まで豊平公園に一度も行ったことがなかったのです。豊平公園は、きたえーるに隣接したところにある自然の公園ですけれども、この時期、あそこはアジサイがとともきれいに咲くことで有名なのだそうです。それを知って、1か月ぐらい前にふらっと出かけてみたら、とても美しいすばらしい公園でした。

ところが、市民でありながら、地元の公園のことをほぼ知らないなんていうことがよくあって、実をいうと、足元を見ると連携中枢都市圏の自治体の中にもいい場所、この季節だったらあそこに行ったらすごくいいよというようなところが恐らくたくさんあると思うのです。掘り起こされていない、ないしは、まだそれがきちんと伝わっていないような資源をきちんと掘り起こすとともに、いつにどこに行くといいよマップみたいなものを作ると、それだったら車で小一時間だから行ってみようかというふうに考えると思うのです。

このコロナで、星野リゾートの星野さんは、まずは車で1時間ぐらいのところを観光しませんかとマイクロツーリズムという新しい概念を提唱されています。今、Go Toキャンペーンがいろいろ批判にもさらされているわけですが、以前のような長距離を移動す

る観光とは違うタイプの余暇の過ごし方というようなことも方向性に含めて、こういったビジョンに反映させていくことも、この懇談会の一つの役割かもしれないなということを思いながら、私は今回の懇談会に臨んでおります。

私が勝手に話していますけれども、委員の皆様、どんなことでも構いませんので、お気づきの点、ないしは、これは方向性としてもっと推進すべき、ここは少し見直すべきだといったことでも構いませんので、ぜひどうぞ。

○福井構成員 働き方の件で一つお話しします。

今日、札幌市内の最高気温は20度ぐらいしかないとフェイスブックにアップしたのです。そうしたら、何で札幌はそんなに涼しいのだと東京と大阪の人が食いついてきました。この時期に東京に行かれた方は分かると思いますが、とてもではないですけれども、我々が暮らしているような環境ではないですよ。ですから、夏場だけでも札幌で働いたらどうですかと促しているのですが、やはり本州の人から見るとすごく羨ましい環境なのです。ワーケーションまでいくかどうかはありますけれども、この魅力をどう伝えていくか、今日は寒いぐらいですが、この環境はあり得ないですから、本当に羨ましがられるのです。

なおかつ、会長がおっしゃるように、1時間出ると田園風景、畑の風景、山がある、海がある、湖もある、こんな地域は多分ほかにはないです。ですから、いかに人を動かしていくかということも当然ありますし、例えば、自分もそうですけれども、札幌の皆さんは、ふだん行っていて他の人に話していないことがたくさんあると思うのです。この時期は絶対ここに行っているとか、ここに行って何か買っているとか、秋は絶対にここに見に行くのだというのはあるのだと思うのですけれども、他の人に絶対言わないですよ。ですから、ビジョンと離れるかもしれないですが、例えば、札幌市の職員の方々はふだんどこに行っていますか、逆に、周辺自治体の方々はどこに行っていますか、観光というよりは、ふらっと1時間周辺へ出かけるときにどこに行っていますかといった調査をしてみるといいかなと思いました。

なおかつ、もう一つ、働き方で、札幌市の職員の方々が周辺の自治体に仕事で行って見たらどうでしょうか。出張ではなくて、例えば、1週間、1か月、副業感覚ではないですが、試しに働いてみると。都会にいる感覚と、地方の市町村の感覚はやはり違うと思うので、離れてみると札幌のよさが分かると思うのです。私も、商工会議所が道内に42あって、大体、市部と町部にあるのですけれども、やはり出張に行っているいろいろなまちへ行って話を聞いて札幌に帰ってくると、やはりその地域のよさも分かるし、札幌のよさも改めて感じます。特に交通の便なんて全然比較になりませんから、そういったものを感じるのはすごく大事だと思うのです。体感するというのがないと人はなかなか理解し難いし、情報として蓄積されないので、札幌市の職員の皆さんもいろいろなまち、周辺の11自治体に実際に長期で足を運んでみるというのも今だからできることかなと思います。

働き方という部分もあるのですけれども、多分、生き方にも通じてくると思いますので、一つ札幌市としてのアクションというか、行動があってもいいかなと感じました。

以上です。

○平本会長 働き方、それから、生き方といったことに関して、連携中枢都市圏ができたことで、我々は都心部の札幌以外の目線というものをきちんと共有するべきだというようなご意見かと思えます。

それから、冒頭の札幌市の最高気温が20度しかないというのは、その代わり冬はマイナス10度で寒いのですけれども、この時期に札幌で働きたいという人は本当にいます。私の妹も東京で働いていますが、いいな、お兄ちゃんのところはエアコンがなくても暮らしていけてというふうについていわれます。ですので、このビジョンと直接関わりないように思うかもしれませんが、この11の構成市町村がそれぞれ魅力を持っていると思うのです。先ほど企業誘致ということで、合同で出展をしたということがありましたが、企業誘致だけではない、いろいろな方向性で北海道に人に来ていただける、ないしは、定住ではなくても一時期来ていただけるというようなこともあるかもしれません。

今、福井さんにおっしゃっていただいたことというのは、このビジョンのあるパーツになると同時に、それを何かほかの要素と組み合わせると、いろいろな可能性が出てくるのではないかなと思いつながりながらお話を伺いました。

ほかにはいかがでしょうか。

西村さん、お願いいたします。

○西村構成員 水を差すかもしれませんが、医療者の立場で言わせて頂くと、このコロナは、多分一、二年続くと思えます。そうなった時に、医療が逼迫してくると、今までのお話にあったことは進まなくなってくると思えます。医療を回すのは当然医師会の責務だと思います。先ほどあった救急安心センターさっぽろも一時動かなくなって大変なことになっていたのですが、今は何とか回せるようになってきていますし、我々も今いろいろと協力してPCR検査センターをやっているところです。

今、重症者は大して多くないと言いますが、中等症患者はみんな入院していて、病院は結構大変です。ですから、経済を回すのはとても大事だと思うのですが、めり張りを作っていたきたいと思います。医療者の立場としては、感染が増えたときは、皆さん、3密に気をつけてくださいね、でも、落ち着いたらまたというような、そういうめり張りをつけていただけると、我々としても立ち行くのです。

特に高齢者は、何人か亡くなった方を知っていますけれども、あつという間に悪化していきます。それは何としても避けてあげたいと思いますので、そこを一言、医師会の立場から述べさせていただこうと思いました。

以上です。

○平本会長 とても大事な視点だと思います。

これは、国もそうですし、道もそうですけれども、特に緊急事態宣言を出して、しばらく自粛をして経済が非常に冷え込んで、しかも、そこにいろいろな補助金、給付金をつけて、もう大分原資が底をついているので、次にもう一回自粛してくださいということが言

いづらくなっているというのが実態なのかと思うのです。

ただ、一方で、我々大学もそうですけれども、例えば、道のレベルが次のレベル、ステップ1からステップ2に行くとか、警戒レベルが一つ引き下げられるということを契機に、これまでは完全オンラインだった授業を一部対面にしてもいいよというようなことが決まっていくのです。それを、今、西村さんがおっしゃったように、現場は確かに混乱するのかもしれないのだけれども、危なくなったら締める、少しよくなったら緩めるということ割と機敏にやっていただくほうが実はいいと思うのです。

今、東京で感染者が大分増えてきているのに、こんなに緩めてしまって大丈夫かな、でも、道も特段の引締めをしないので、そうすると、2学期からは大教室に学生を集めて対面授業をやらなければいけないのかなと今我々は真剣に考えています。もちろん、最終的には大学が独自で判断することなのかもしれないですけども、そのときに状況をきちんと反映させたような危険度のシグナルを出していただくことが本当は重要で、この会議で言っても仕方がないことかもしれないですが、そんなことを日々思いながら暮らしております。でも、緩めっ放しでは駄目だよというとても重要な指摘だと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

どうぞ、お願いいたします。

○木原構成員 観光振興機構の木原と申します。

連携の市町村のそれぞれのエリアを見ておりましたら、私も実は小樽や千歳で勤務をしていたりということがありますが、自慢できる市町村ばかりだというふうに思っております。例えば、資料の中でも、それぞれ特色のあるスイーツとか、食といったものもしっかり触れられているのですが、これらを市町村ごとにもっともっとピックアップすることによって、その市町村のよさを掘り起こすことが十分可能だろうなと思っております。

特に、道民もそうですけれども、本州からのお客様であったり、海外からのお客様というのは、北海道の魅力というのは、自然もありますが、やはり食だというふうに思うのです。札幌でなければ味わえないものとか、ご当地に行かなければ味わえないようなもの、特にこの広域観光の部分で、この地域を特定したものをもっとクローズアップし、さらには、SNSで情報発信することによって、観光のお客様をはじめ、たくさんの方に来道していただくことにつながってくるのではないかなというふうに思っております。

直近では、ウポポイがオープンしております。これらをフックにしながら、白老に行ったらウポポイがある、次はどこへ行こう、ここへ行こうというモデルルートみたいなものもつくりまして、ここに行ったらこういうものも楽しめますよ、こういうものも飲めますよと。見ていましたら、やはりアルコールに関するエリアというのも非常に多いと思うのです。日本酒、ワインといったものもやはり売りの一つになると思いますので、その辺を上手に情報発信することも必要ではないかなというふうに思っております。

ウポポイの関係で申しますと、北海道と観光振興機構がタイアップをして、「北海道はゴールデンカムイを応援しています。」ということで、ARスタンプラリーなども実施し

ております。その中には、札幌のエリア、小樽のエリアなんかもスタンプラリーで回っていただくこともできますし、それらから、また、道内各地を回っていただくことよっての交流人口の拡大もできるというふうに思います。

私も、「ゴールデンカムイ」は、テレビで見ておりましたけれども、非常に興味深い、実際にリアルな建物も紹介もされておりますので、そういった部分も十分観光のフックになるのではないかなというふうに思っているところでもありますので、その魅力をどうぞ発信していただきたいというふうに思ったところです。

それから、もう一つ、インバウンドの関係でお話をさせていただきますと、ご存じかもしれませんが、朝里駅というのがフィルムコミッション的な要素が非常に強くて、例えば、中国では映画「恋する都市」や、韓国では、かなり古いですが、映画「Love Letter」が人気で、12月に雪が降ると同時に映画の舞台である朝里駅へ、多いときで1日1,000人を超えるぐらいの観光客が来ていました。当時は、200人、300人ぐらいだったのですが、それも雪の降るシーンで、ウェディングドレスを着たカップルがいて、やはり、すごく絵になるシーンをSNSで発信することによって、私たちも行きたいと。ウェディングドレスが非常にいいシチュエーションになり、海が見えて、小樽の高島岬が見えてということもありまして、そういったところも観光要素としても十分波及できる部分だと思っていますので、情報の発信の仕方一つ工夫するところではないかなというふうに思ったところでもあります。

以上です。

○平本会長 ご当地ならではの魅力の発信、それから、まだ隠れているけれども、十分に価値のある資源の発見、発信、それから、ウポポイのようにフックになるようなリソースをうまく使いながら交流人口を増やしていくというようなご指摘かと思ひます。この広域圏という観点からも、大変有意義なご指摘だと思ひます。

ほかはいかがでございしょうか。

どうぞ、中原先生。

○中原委員 札幌市立大学の中原でございします。

今日の資料7にある今年度から新たに追加となった取組について、若干コメントをさせていただきますと思ひます。

新たに上がっている4つの取組は、どちらかという、新型コロナウイルス感染拡大防止策と、2040年問題が織り交ざった取組という感じがいたします。

この中で、例えば、1番目の「自治体行政サービスのスマート化」は、オンライン化の推進ということ強くうたっていらっしやいます。2019年度事業実施状況の中で達成が悪かったものの中に、「遠隔会議システムの導入・活用が思ったより進まなかった」とありました。今回、コロナの影響によりまして、逆に、このオンライン会議というのは、どこでも、当たり前のようにどんどん取り入れられているのが実情です。大学に至っては、学内の会議はもちろのこと、授業も全部オンラインで行っているわけでございます。

我々、札幌市立大学は、実はキャンパスが大きく2つに分かれています。芸術の森にあるデザイン学部、それから、桑園の市立札幌病院に隣接しています看護学部、それぞれ2つの拠点があるのですけれども、この間の距離が約15キロ以上離れているのです。我々は、学内会議という両学部にまたがる全学の会議となると、どちらかのキャンパスに移動しなければいけません。車でも、片道45分から、場合によっては1時間ぐらいかかります。往復しますと、それだけで2時間ロスしてしまうのです。一部、テレビ遠隔システムを使って会議をやってはいたのですけれども、やはり、ある程度込み入った問題は対面式の会議が功を奏するというのもあって、これまでオンライン化がなかなか進まなかったのです。今は背に腹は変えられないので、オンライン会議を導入したのですが、むしろ我々はこのメリットの恩恵を非常に強く受けることになったのです。移動しなくて済みますので、逆に、他のことに使える時間が増えるわけです。

同じようなことが学生についても言えるのです。わざわざ遠いキャンパスに来なくても、空いた時間を有効に活用できる。加えて、学生同士もオンラインシステムを使ってミーティング、ディスカッションや、合同プロジェクトの取組ができるようになってきており、それは極めて効果が大きいと思います。今まで移動で失っていた時間を、逆に、本来のことに時間を割いたり、お互いのコミュニケーション頻度を増やすことができるようになりました。

札幌市立大学の場合、非常にスケールの小さな大学で、2学部しかありません。我々にとって見ると、逆に、小さな規模を逆に、その特徴はいかなく発揮できるような方向に持っていけるという手応えを今感じているところでございます。「さっぽろ連携中枢都市圏」も広域圏ですので、オンライン化をどんどん進めていただければ、今まで気がつかなかったような新たなメリットが出てくるという感じがしました。

それから、今年度からの取組の中に「GIGAスクール構想」がございまして。これも新型コロナウイルス感染防止というふうな意味でも、その必要性が改めて認識されたところでございまして、早急に推進すべき施策の一つと思うところでございます。

ただ、ややもしますと、パソコンやタブレットをとにかく早期に大量に導入しなさい、また、ネット環境を充実化しなさいということに終わってしまいそうな気がするのですが、それでは大事な視点が欠けてしまうのです。問題は、そのような豊かな環境が整備されたときに、その環境を十分に活用できるようなITの運用に向けたカリキュラムや指導ができるような教員、あるいは、ご家庭の親御さんの情報管理、活用能力といいますか、いわゆる情報リテラシーの向上も検討していかなければいけないと思うのです。そういう意味で、物品、ハードの整備だけではなくて、ソフトの仕組みづくりにもお金をかけていくという視点も、この中で十分検討していただければと思うところでございます。

以上です。

○平本会長 オンライン化ということが連携中枢都市圏とうまくフィットするはずだということでした。特に、今、中原先生がおっしゃった移動時間の無駄が解消されるのはとて

もメリットが大きいことかと思えます。

先ほど、たしか福井さんがおっしゃったと思えますけれども、せっかく実務者会議をやるのなら、オンラインで1か月に一遍ぐらいやってみたらどうかというようなことも多分ヒントになろうかと思えます。

また、G I G Aスクール構想も、強力なI T化という話だけれども、そこにはリテラシーの問題や、いろいろな付随した問題が付きまとうのだということで、そういった問題意識も重要だというご指摘だと思います。

ほかはいかがでございましょうか。どのような視点でも結構です。

どうぞ、福井さん。

○福井構成員 G I G Aスクール構想に関してですけれども、私もやはりこの状況になってオンラインを頻繁に使うようになったのです。一番広域は北は北海道から南は福岡まで集まって打合せを何回もしました。飲み会もやりました。ふだんだと1年に1回会えるか会えないかのメンバーが集まれるのですよね。確かに対面のよさはありますけれども、オンラインの手軽さはすごくあるなと認識しました。

何を申し上げたいかという、さっき先生がおっしゃったように、ソフトの面をどう使うかという部分と、今までなかなか呼べなかった人をオンラインで呼べるのです。例えば、学校に社長をオンラインで登場させることができますが、これは今までなかなかできなかったのです。例えば、社長の時間を2時間、3時間拘束するのはほぼ不可能だったのですが、オンラインのために30分だけ出てくださいということは可能になります。もっと学校と社会をつなげるツールになるのではないかなというふうに考えていまして、我々も、今、大学といろいろやっているのですが、ふだんからの距離をもっと縮められるのではない、あるいは、さっきおっしゃったように学校と経営者の皆さんをつなげるツールにできるなというふうに考えています。

時間的コストもありますし、確かにそもそものコストもあるので、人を呼ぶのは大変です。それを考えると、やはりこれだけ使えるツールがもう普通に手短に使えるというのは、すごく契機になったなと思えます。ぜひうっとうしく思わないで、ちょっとした打合せでもオンラインを使うみたいな感覚で、ぜひ使っていただきたいなと思えます。

以上です。

時間的コストもありますし、確かにそもそものコストもあるので、人を呼ぶのは大変です。それを考えると、やはりこれだけ使えるツールがもう普通に手短に使えるというのは、今回のこれがよかったとは言わないですけれども、すごく契機になったなというふうに思えます。ぜひうっとうしく思わないで、ちょっとした打合せでもオンラインを使うみたいな感覚で、ぜひ使っていただきたいなと思えます。

以上です。

○平本会長 従来だとなかなか呼びづらかった人が簡単に呼べるというのは本当にそうできて、私は、毎週火曜日の午後にゼミをやっています。ゼミの卒業生というのは、今、世

界中あちこちに散らばっているのですけれども、つい2週間ほど前のゼミには、オランダの現地法人の社長をやっている卒業生がオンラインで参加してもいいかと事前に連絡が来まして、ゼミに参加してくれるわけです。現役の学生にいろいろな話をしてくれる、そういうことがほとんどコストをかけずにできるということはとても魅力的だなと思ひまして、いろいろなOB、OGにじゃんじゃん参加してと言ったら、いろいろな人が私も、私もと言って、今、ウェイティングリストができるような状況です。

もちろん対面のよさというのもあるので、そこをうまく使い分けるといふことは重要だと思ひます。多分、全部オンラインにしてしまうと、物すごく味気なくなってしまうとは思ひますけれども、でも、オンラインのよさをうまく使えれば、今までなかった新しい価値が生まれてくるのではないかというご指摘だと思ひます。

ほかはいかがでしょう。

どうぞ、お願いします。

○酒井構成員 私も関連してですが、私どもの財団もインキュベーション施設を持っておりまして、今、その入居者の動向にもかなり変化が出てきているのです。

6月に、北海道新聞社の2階に、DRIVEというインキュベーションとワーキングのおしゃれな感じのスペースができて、そこを管理されている方とこの間お話ししたときに、あそこの活用が非常に好調だと。やはり、都心部に拠点が良いのだけれども、それは小さくていいのだと、大きなものを都心に持つのではなくて、小さい拠点があつて、あとは賃料の安い郊外でもというようなところが非常に多いのだよねというようなお話をこの間されていて、これもやはり同じような話かなと。

私どもも、札幌の中で、東札幌と厚別のテクノパークに施設を持っているのですが、テクノパークが意外と好調だったりして、札幌の中でも今後そういうことが起きてくるのかなというふうには考えていたのですが、これを広域圏で考えてみると、やはり先ほどおっしゃられたように、いろいろないいところがそれぞれの拠点、まちの中にあるわけです。これからのオフィスの在り方を考える意味でも、札幌の都心の中心部的なところにある拠点と、もう少し家賃が安く気に入った場所というようなことをセットで発信をしていくと、圏域として新しいオフィスの在り方というのでも考えることができるのではないかと、皆さんの意見を聞いていてそんなことを感じました。

○平本会長 都心の拠点は小さくてもいいのだというご指摘は、確かにそのとおりです。最近、IT企業の一部が本社というか、オフィスをやめるというようなことが報道されていますので、それはおっしゃるとおりです。

一方で、実は、私の家内が歯科医師で、彼女には、あなたの仕事はいいわね、リモートとかいって家のソファーに座って授業をやっているのだからとよく指摘されます。絶対にコンタクトしなければいけない仕事も、世の中にはたくさんあるのです。ですので、オンラインでできる仕事と、コンタクトしなければいけない仕事を、うまくバランスを見て、例えば、都心のオフィスが少し空くのならば、交通の便のいいところにコンタクトが必要な

サービスを持ってきてはどうか、ミックスというのでしょうか、そういう発想も重要ではないかなということをお酒井さんのお話を伺って感じた次第です。

ほかはいかがでしょうか。

李先生、どうぞ。

○李副会長 実は、私、昨日まで東京に出張してまして、羽田から帰ってきたので、発言を控えようかなと思っていたのですが、せっかくですから、発言させていただければと思います。平熱だったので、大丈夫だと思います。

皆さんがおっしゃったとおり、今、コロナ禍で、私たちがオンラインで授業もやっていますし、私たちは3大学統合の真ただ中で、北見工大と帯広畜産大学と当大学が2022年に経営統合を進めているのです。今までは、本当に、やれ帯広だ、やれ北見だということで、会議のために飛行機でしょっちゅう出張していたのが、今は全くなくなって、全部、ウェブでの会議です。ところが、会議の数がえらく増えてしまって、1週間に何回も会議をやっているのです。

それで、一ついいなと思ったのは、今日はこうやってペーパーが配られています。対面でやると配られるのですけれども、Zoomでやるとペーパーは配られないです。ですから、ペーパーレスが進んでいまして、今まで大量にファイルしていたのがなくなって、それもすごく楽だなと思っています。

ついでに言うと、例えば、今、キャッシュレスやレジレスというところにどんどん進んでいくので、こういったものも含めて、コロナ禍で、ある意味、ベターライフに進んでいると思います。そこはもう札幌が中心になって、イの一番で進めてほしいなと思いました。

もう一つ、今日の議題は、近隣市町村といかに広域的に連携しながらということですが、けれども、こういったオンライン、リモートが当たり前になってくると、本当に近隣だけで集まる必要がないと考えております。先ほど全国という話もあったのですけれども、むしろ、本当にオホーツクや函館も近場として、いろいろな情報交換、あるいは、連携の模索というのが必要になってくるのかなと思っています。ここで得た知見やアイデアは、できればほかの自治体や振興局ともコラボしながら進めていければいいなというふうに思いました。

あとは、さっき食の話が出たと思うのですけれども、去年、たまたまスペインのサン・セバ스티アンに出張に行く機会がありました。あそこは美食のまちで、ガストロノミーが売りで、ヨーロッパの金持ちたちが本当に食べに来るのです。しかも、バルが物すごく発達しているまちで、多分、札幌のすすきのぐらいの一角に200件ぐらいのバルがあって、それぞれ特徴ある料理が違ったりするのです。ですから、本当にもう何回も行かないと食べ尽くせないみたいな上に、季節ごとに料理も違ってくるので、人口18万人ぐらいに何百万人のヨーロッパの金持ちたちが本当に食べに行くのです。

おっしゃるとおり、やはり北海道というのはこれだけ食材に恵まれています。なかなか付加価値がついていないという声もあるのですけれども、そこを上手にPRすることによ

って、食を通した新たな観光をつくると。今までは、多分、中国、韓国、台湾にかなり頼ったインバウンド観光だったと思うのですが、もう一步ステップアップできる新たなコンテンツづくりというのにも必要なのかなと思っています。そういった意味では、今までできなかったものを一つブレークスルーする形で、食を通した新たな価値づくりも必要なのかなというふうに感じました。

ばらばらですけども、以上です。

○平本会長 このさっぽろ連携中枢都市圏というのは、まさに、この道央、さっぽろ圏の12市町村をネットワーク化しようという発想の話ですけども、オンラインになると、別に地理的なまとまりがなくてもいけるはずだと。それから、札幌で体験したいことを別のエリアでもきちんとまねしていただくということが重要ではないかというご指摘、それから、食というのはまだまだ掘り起こしの余地があるのではないかというお話だと思います。

ほかはいかがでございましょうか。まだ時間はかなりございますので、もし何かあればご遠慮なくご発言いただければと思います。

ここまでのところのお話を伺っていると、この懇談会ができた当初は、どちらかというと、札幌という中枢都市があって、札幌がいろいろなリソースを持っていて、そのリソースを一部連携市町村に使ってもらうのだというような発想が無意識のうちにあったような気がするのです。ところが、今までのお話を伺うと、もっとフラットというか、皆さん、無意識のうちに、いわゆるネットワーク的な発想にシフトしているような気がします。そもそも、札幌とその他という言い方がよくないのかもしれないですけども、より人口が多いところと少し人口が少ないところで、それぞれ持っているメリット・デメリットが違っています。それがさっぽろ圏では札幌とその他の都市だけれども、北海道でいくと、さっぽろ圏とその他のエリアになるし、日本で見ると、東京、大阪、名古屋とその他のエリアというような形で、ある種の相似形みたいになっている可能性があります。そこにオンラインというようなものが入ってくると、従来とは少し違うような関係性が見えてくるのではないかというようなことを皆さん少しずつお話しされているのかなと感じながらお話を伺っております。

いかがでしょうか、何かあれば、どうぞお願いいたします。

○木原構成員 旅行という切り口で、一言、お話しさせていただきたいと思います。

今回のコロナ禍によりまして、修学旅行という観点では、例えば、ホテルの部屋を今まで4人で使っていたところを2人で使うとか、バスも1台40人で使っていたところを20人にして2台出すという形に変わりつつあり、実際にそういう手配も動き始めております。そういったことで、このコロナ禍がより質のよい旅行サービスの提供にもつながってくる部分というのは相当期待ができるところもあります。

新北海道スタイルは、いろいろな施設、飲食のお店を含めて、かなり対応していただいておりますけれども、今回のコロナ禍を逆手にとって、先ほど北海道は涼しいというお話

もありましたが、北海道全域がソーシャルディスタンスになっているのだろうというふうに思っています。これを全国に発信することによって、札幌を中心に、それこそ広域連携の各エリアの中でも、資料5のⅡ-1のところ、構成市町村の概況を見せていただいても、十分に教育素材としても使わせていただける市町村というのが見受けられますので、これを機に、また新たな旅行形態を提供していくといいますか、情報発信することも考えられるのではないかなというふうに思った次第です。

以上です。

○平本会長 旅行、観光というような切り口から圏域の魅力の再発見が可能だろうと。

それから、今のお話でおもしろいのは、結局、コロナ禍のおかげで旅行の質が上がっているということです。その分、コストもかかるのかもしれないですけども、そういうような思いもかけない、いい面もあるというようなことがご指摘として興味深いと思って伺いました。

ほかにはいかがでございましょうか。

どうぞ。

○福井構成員 木原常務理事のお話に関連してですが、やはりそれがMICEの次の展開につながるのではないかなと思うのです。例えば、今までの延長線上だと、やはり経済にしても、観光にしても、レベルがまだ足りていないというか、富裕層を呼べるだけの環境になっていないというところがありましたので、ここでこの時間を活用してレベルアップをしていくいいタイミングだろうと思います。今、誘客をできる状況ではないので、次の戦略レベルアップを狙うための時間と考えて、このMICE戦略を考えていったほうがよいと思いました。

以上です

○平本会長 MICEについては、多分、コロナの影響で足踏み、あるいは、後退だと思うのです。ただ、それは、今、中島公園に作ろうとしている大きな箱というのは、まさに今言ったように大きな箱で、どちらかというところ、規模を追求しているようにも思えるのです。恐らく、これから世の中は、たくさんの方が集まって、何か大きなイベントをやるということではなくてくる可能性があります。そうだとすると、本当に質を追求するというのでしょうか、売上高ではなくて利益率というようなたとえがいいのかどうか自信ないですけども、もしかしたら、そういったような発想に切り替える契機になるのかもしれないです。ですから、MICEも、大規模なコンベンション施設みたいなものをどかんと作るということよりは、また来たい、今度は家族と一緒に来たいというようなすごくいい体験ができるようなものを考えるというのが、今の福井さんのご指摘の中に含まれているのかなというふうに思います。

ほかにはいかがでございましょうか。

もちろん、早く終わっても全然構わないのですけれども、せっかくこうやって久しぶりに皆様のお顔を拝見しながら会合を持てたということもありますので、もしよろしければ、

お一言ずつでも、御発言をどうぞお願いいたします。

○向田構成員 環境事務所です。

もう既にお話しされているのかもしれないですけども、私は、初めてなものですので、最近の動きということでお話しさせていただきます。

札幌市では、たしか昨年12月に、ゼロカーボンシティということで宣言をされたというふうに聞いております。これは北海道自身もやっぺらっぺらいますし、古平町もやっぺらっぺらというので、今後、ゼロカーボンというのがどんどん進むだろうというふうに考えています。

日本全体で見ましても、もう既に人口比でいけば半数に上がるほどの自治体が2050年にはCO₂の排出を実質ゼロにしますということで宣言されています。

札幌では、今、環境審議会で実行計画というのをつくっていらっぺらいまして、2050年にこの札幌市でCO₂の排出をゼロにするためにはどういったことをやっぺらいかなければいけないのかというのを今お考えです。そうしますと、今ある家の上に太陽光パネルを載せればいいのか、いろいろあると思うのです。ZEBの建物を造っていく、あるいは、自動車であれば電動としていくということで、どんどん変わってくるというのがあるので。

ただ、それでも、札幌市が2050年に今の排出量がゼロになるかということ、ならないのです。どうするかということ、札幌市以外のところの再生可能エネルギーを調達してこないことには、もう全然無理なわけですから。何を申し上げたいかといいますと、もう既にこういった形で連携中枢都市圏ということで、周りの自治体と連携をしていらっぺらるわけですから、再生可能エネルギーをつくってもらふ施設というのがどんどん必要になってくるだろうと。この11の自治体のみならず、ほかにもどんどん必要になってくるだろうとっております。この方向で北海道でも一つの産業といましようか、再生可能エネルギーの賦存ポテンシャルは非常に高いところですので、この連携中枢都市圏を皮切りに、札幌市も今まで資源があるというわけではなくて、逆に、ほかの自治体からいただくような形で連携を深めていただくといいのかなと思っております。

○平本会長 環境、あるいは、ゼロカーボン、エミッションをゼロ化するというようなご視点から、まさに連携中枢都市圏で協力する、ないしは、その周辺にもう少し広げていって初めて札幌市のカーボンゼロが実現可能になるという大事なご指摘だと思います。

だからといって、周りで再生可能エネルギーをつくってくれるから札幌は何をしてもいいのだということには全然ならないわけですから、そこら辺のところはやはり市民の意識を高めていくということが必要だと思っております。排出権みたいなものをきちんとやりとりして、トータルでのカーボンの排出を実質ゼロにしていくというご指摘だと思います。

ほかはいかがでございましょうか。どなたでも結構でございます。

今年度の新たな取組として、シニアのさらなる活躍に向けた取組の検討というのがありまして、これは予算規模でいくとそんなに大きくないですけども、何かおもしろいこと

をお考えだというふうに伺っているのです。シニアの方と外国人の方をうまく結びつけて、例えば、観光の案内や、まちの情報の提供など、シニアの人たちにご活躍いただいでやってはどうかと。そうすると、ある程度、時間に余裕があって、まだまだ社会に関わることができるシニアの方々が輝くようになるのではないかと、そこに寺島実郎さんがアドバイザー、座長としてお入りになって、そういうようなことを考えているということです。こんな取組も広域でやろうということで、今、連携中枢都市圏の中で考えております。

この中でいきますと、先ほど周遊というようなこともありましたけれども、マイクロツーリズムや、圏域での人の動きをもう少し活性化できるような取組で、そこに地域公共交通、あるいは、資源の再発見や発信をうまく結びつけて、この連携中枢都市圏の魅力を一層高めていくことの必要性ということが、もちろん問題意識として資料7に取り込まれているということかと思えます。

いかがでございましょうか。

8時になりましたが、もうこれで皆さん今日は話し尽くしたということであれば、少し早いですけれども、この会を閉じて構いません。せっかくですので、もう少し発言されたいということでしたら、時間はまだ二十数分ございますので、ご発言をどうぞお願いいたします。

○福井構成員 最後に、1点だけ。

ビジョンの冊子の9ページですけれども、若い人の転出が止まっていないのです。今回のテーマの一つに、「選ばれる」さっぽろ圏域とあるのですが、やはり若い方々にも選んでいただきたいと思えます。このさっぽろ圏へのふるさと納税をお願いするチラシにも当然書かれていますが、魅力的な地域にしていくというのは、これからの大きな課題かなと思っています。

なおかつ、今回のコロナ禍にあって、選ばれるところと選ばれないところが出てくると思うのです。それを意識して、この圏域が選ばれる、特に若い人たち、あるいは、若い女性に選ばれる地域をぜひ目指していきたいと思えます。この人口動態の数字というのを逐次見て、転出を何とか止めるか、あるいは、戻ってきてもらえるような環境をぜひつくっていききたいと思っています。

以上です。

○平本会長 実は、とても大事なご指摘であると同時に、長らくこの札幌を中心としたさっぽろ圏で実現できていないことです。私自身も、自分のゼミの学生などを見ていると、みんな東京ないしは大阪に本社がある大企業に就職していくわけです。働く場所がないという言葉が過ぎますけれども、やはりより規模の大きい企業で力をつけたいと思うと、道外に出ていかざるを得ないというようなことが現実にあるのです。

一方で、仕事があれば札幌に戻りたいと言っている人たちは物すごく多いです。これは紛れもない事実でして、いつかは札幌に帰りたいのだけれども、今の収入を維持できる仕事が札幌にはない。でも、先ほどのテレワークとか何とかということになれば、居住地は

札幌にあって、所属している企業の本社が東京ということも可能になるかもしれないですよ。ですので、そういうような形で、さっぽろ圏にしながら働けるような仕組みというのはどうやってつくっていくかですね。

あるいは、もう一つ、若いうちに出て行って、10年、15年、実力をつけて、人脈と能力と両方持って戻ってきてくれるというのも重要だと思うのです。この二つの方向性で、この人口転出の問題を考えていくことが必要だともう10年前から言っていて、なかなか実現していないのが実態かと思います。ただ、大事なご指摘だと思います。

ほかはいかがでございませうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本会長 委員の皆様方、今日のところは大体よろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○平本会長 それでは、今日は、どちらかというところ、新型コロナウイルス感染症やオンラインということが話の中心になってしまった嫌いはあります。一方で、この圏域、連携中枢都市圏というエリアとして魅力度を高めていくためのヒントになるようなご意見、ご発言も多々ございましたので、そういったことを受けながら、今後、行政としては、様々な施策を展開していただきたいというふうに思います。

また、タスクフォース等もこれから幾つか立ち上がっていくということですので、そういったところも期待をしたいと思います。

スケジュールによりますと、次回の懇談会は、1月ぐらいに予定されているということです。そのタイミングで、また今年度の様々な事業等の進捗を確認した上で、今後の方向性について、改めまして、皆様方からご意見を頂戴するというようなステップになろうかと思っております。

それでは、予定をしていた時間より若干早いですけれども、本日の懇談会といたしましては、ここで一旦閉じることにさせていただきます。マイクを事務局にお返ししたいと思います。

皆さん、どうもありがとうございました。

6. 閉 会

○事務局（浅村政策企画部長） それでは、本日の懇談会を終了させていただきたいと思います。

様々な意見をいただきまして、ありがとうございました。

やはり、コロナ以降、考え方がかなり変わってくる中で、様々な課題が顕在化してきているというふうに思っております。今日いただいたお話を含めて、この圏域における取組を深化させていくように、我々も鋭意検討させていただいて、取組を進めてまいりたいと思っております。

今日は、どうもありがとうございました。

以 上